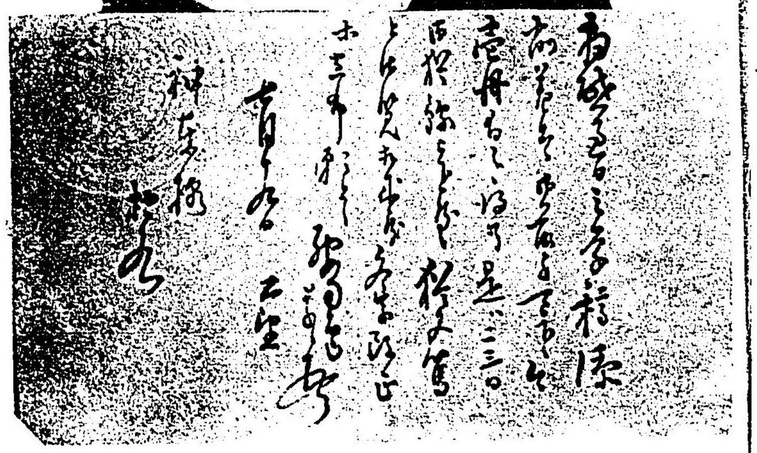
Marquis Saionji



94-468

序

西園寺侯は實に二代の高人である、其の天品の高潔と性情の清粹とは誠に世の儀表とするに足るものではないか、去年の夏自分は屢々侯を駿河臺の邸に訪づれ、さて問を設けて西洋禮式に關する談話を聞き、其の當時の中央新聞紙上に連載した、本書は卽ち其れを輯錄したもので、題して西洋禮式談とは云ふも云ふべきものである。

我日本は日露戰爭の結果今や一躍して世界一等國の伍伴に入つたが、其れと共に列强との國際的親交も漸く濃にならんとし、國民的交際も愈、繁多となつ

明治
39 11 14
内務

て來たのである、同時に我國固有の衣服習俗は漸次變態して、私交の上にも公會の上にも、歐米の禮法を適用する場合が非常に增して來たのは自然の勢で誰の目にも認めらるゝものである、是れ實に亞細亞の日本が世界の日本となり、東洋的國民が世界的國民となつた事を立證するものであるから大に喜ぶべき傾向と言はねばならぬ。

然るに我國民中の大部分は未だ能く歐米交際社會の通規や慣例に通じない、又規律を解するものも少ない、そして動もすると禮法を無視し依然逞頭垢衣自から東洋的豪傑を氣取つて內外の社交界に立ち入る者さへある、斯くの如き行は獨り國民の體面を

傷くるばかりでなく、國家の價値を損すること頗る大なるもので、大に注意を要すると共に一般國民間に文明國の禮法の大體を普及せしむる必要がある のである、是れ本書を發行する主なる理由である。

然し吾々は何事も殊に禮式に於て極端に歐米を學べと云ふ樣なものではない、出來得べくば日本固有の美風に歐米禮法の長所を採り打つて一團としたいのである、卽ち此の新興の時代に際し東西の禮法を折衷して新國民の衣食住に最も適應する新禮式を定めたいのが編者の希望である、本書は一面に於ては實に其目的に違する第一歩なので是を基礎として之を精神として新禮式を研究したらば能から

うと思ふのである。

政友會の總裁として、現内閣總理大臣として、内外の重望を負はるゝ西園寺侯は、多年歐州にあつて或時は巴里に或時は伯林に、或は日本の一貴公子として、或は我國の全權公使として、各國の宮廷は素より社交界に馳聘奔走された方であるから禮法を熟知せらるゝは曰ふ迄もなく、侯の口より出た禮式談が如價に價値あるかは改めて云ふ必要はない、吾等は讀者諸君が本書によつて先づ西洋禮式の大本に通じ趣味と實益とを得られん事を望むのである。

明治三十九年十月

編者識

例言

一、本書は西園寺侯と編者との問答を、森本氏の速記錄に基きて取捨し、草稿成りし後更らに侯の嚴密なる添削を經たるものなれば、侯の語調を寫すに於て殆んど何等の遺憾なく、讀者は親しく侯に接して其の明快なる談論を聞くの思あらん。

二、禮式の問答なれども素と大本を說き區々たる末節に及ばず、又都合上後に省きたる項もあり、編者の問方の足らざる所もあれば、あるべきものにてなきものもあるべく、足らざる節も少なからざるべし、斯くの如きは他日更らに補ふ事もあらん。

西園寺侯

西洋禮式談

目次

西洋禮式一斑……一
名刺……九
訪問……一七
紹介……三一
服裝……三七
手紙……四八
饗宴……五〇
喫煙……五四
喪……五八

三、校正には極めて意を用ひたるも尚ほ誤植等なきを保せず斯の如きは編者の侯及び讀者に對して深く謝する所なり。

四、本書を發行するに當り編者は、西園寺侯が快く編者の請を容れられ、終始懇篤なる應答を惠まれしを感謝し併せて大岡硯海先生が常に有益なる忠告助言を與へられしを鳴謝するものなり。

流行……五九

附錄

西園寺侯……六五

少年時代——維新の政變——侯の洋行——外交官——文部大臣——外務大臣——政友會總裁——侯と趣味——侯と故紅葉山人——侯と故圓十郎——侯と琵琶——侯と俳諧。

西園寺侯 西洋禮式談

神東惇編

問 西洋の禮式の一斑を御伺ひ致したいものです、

答 一口に西洋の禮式と云ふが其れは國々に依て違り方が餘程違ふ樣です、例へば英吉利の事丈を觀て來た者が、日本で英吉利にない禮をすると非常に無禮の樣に思ひ、又佛蘭西許りに居た者は、そんな事は夢にも知らないで、西洋にも其んな妙な事があるかしらと云ふ樣な譯ですから、是が西洋の禮式であると云つて御話しする事は非常

に六ヶ敷いことであります。

其れからお問に答へる前に一言申して置きたいのは、私は全體日本に居た時から、禮式などゝ云ふことは嫌の方でして、殊に西洋に居つた頃は永く書生をして居つたので殊更ら禮式などを餘り嚴しく云ふ事は大いに冷評した側の人間です、其れ故禮式の事を勉強したり、研究することなどは夢にもなかつた、是を日本の極く約した言葉で曰へば所謂平民的の生活をして居たものであります、から今だに三ツ子の魂百までの譬の通り、さう云ふ禮式のことは知らんのであります、唯人情に反したる野蠻的の擧動が嫌ひであるのと、其の後一時外交官となつて居つたのですから、餘り無造作の事ばかりしては勤らぬの

コで、知らず識らず少しづゝ覺えましたくらゐの事であります。

其れから西洋では朝廷の禮式は勿論、外務省などで遣つて居る禮式などは、其れ〳〵式部官とか禮式掛とか云ふものがありまして殊に式部職の如きは幾んど專門になつて居ます、さう云ふ公の禮式になりますと一寸御客を一つしても、第一、席の設け方からして嚴しい、其の邊の禮式になるとなか〳〵外から想像も及ばぬ次第で、其の上國に依て各々古來の習慣がある、其れ故專門家に聞くより外はない、例へば獨逸にて婚禮の時に國務大臣が打揃ふて手に蠟燭を持て座敷中をぐるり〳〵回つたり、或國にて內親王が只一人舞踏室の眞中で踊つたりする事

がある、斯樣な事は今日日本で普迪民間の禮式として研究するにも及ぶまいと思ふ。

一體禮式と云ふものは、所謂エチケット (Etiquette) と云ふものとサヴォアール、ヴイーヴル (Savoir-vivre) と云ふ者との二つにせねば分らぬと思ふ、エチケットと云ふのは例へば斯う云ふ時には斯う云ふ衣服を着けるとか斯う云ふ折には婦人の名を前に出して男子の名を後にするとか云ふ樣な事で、是を日本の茶の湯の式に例へて見れば表千家とか裏千家とか云ふ流儀の別によつて、やれ茶碗の取り樣が何だとか、茶筅の振り方がどうだとか云ふ樣な事であらうと思ふ。

サヴォアール、ヴイーヴルの方では例へば同じフロック

ートを着るにしても、夏ならば涼しさうなものが能いとか、冬なら暖かさうなものが能いとか、或は人に接する時にも相手に依つては餘り丁寧にすると却て對手が迷惑するとか、又次第に依つては如何にも對手の自負心を滿足させる樣に、此方から尊重な態度を執つた方が好いと云ふ樣な遣り工合の方であつて其れが今日は寧ろ大切で紳士の務めることになつてる樣である、其の第二の方になると專門的のものでなくて、苟くも紳士と稱せられて交際社會に出るものは必らず心得べき事で、先づ一般の人々の知つて居るべき筈のものです。

勿論其の中には資性さう云ふ事の嫌の人もあれば又天資巧手な人もあつて、同じ茶の禮式にしても一ヶ月で覺

わる人もあるし一年かゝつて覺えない人もある、私等は不器用の方ですから餘り知りませぬが要するに私の御答は一方の邦の事だけに偏することがあるかも知れませぬ、さうすると外の國の事を知て居る人から非難を受けるかも知れませぬどうか其邊の所は御諒恕を願ひます。

問

一體禮式といふものは社會の進むに從つて段々に複雜になつて行くやうでありますが如何なものでしやうか。

答

否寧ろ簡單になるやうです、此の禮と云ふことは昔は二

種の原因から進行したらしいと思ふ……是れは想像だけれども……一つの方は重に自他の自負心を滿す事、威嚴を保つ事、社會の秩序を保つ事などの爲めに遣つた樣に考へられます、言ふて見れば日本でも太古にあつて既に屋根の制限迄あつたやうに史に見ます、又近世諸侯の外出に金紋先箱がどうであつたとか云ふ樣なことであつて、多くは君主宗教上の尊嚴を保つと云ふことが大部分を占て居た樣に思はれる。

其れから一方の方で云ふて見ると人の記憶を保つと同時に其の事を信向させる爲とも見ます、即ち羅馬等で如此契約をするには何人以上の立會を要するとか如此衣服を着て道路を錬り行くとか、こういふ事です、當時は

總ての事物を筆記して置く事が發達して居ませなんだから人目を聳動するの行爲をなして他日の紀念を喚起したものと見ねます、卽ち記錄に代ゆるの儀式であつたのでしやう。

さて段々と世の中が進歩して來ると共に禮式も舊來の面目を一新し、今日にあつては全く人情に適すると云ふを以て其の本體となすに至つたのです、孔子の理想の禮の用は和を貴しとするが實地に行て來たのです、要するに昔は寒い時も外套を用ゐぬとか雨の中にも雨具を着ぬといふやうな人情の厭ふ事は追々省かれて、又饗宴の御馳走にも可成口に適する物を選ぶと云ふやうになつたので、今は總ての儀式が簡單に且つ人情に背かぬやう

になりつゝあると思ひます。

名刺

問　名刺の事を伺ひたいもので御座います

答　名刺の事は精しくは知らないが先づ私の經驗では、一般に英人は形の小さい名刺を用ひる、米人も小さいのを用ゆるが英人のは殊に小さい、そして總て簡略の書方を好むのです、然るに獨人は最も大形の名刺を用ひて、それに殆んど有らん限りのタイトルを書き込むのです、例へば政友會總裁何の誰とか東京市會議長何某と書く樣な風

であるが、然し其れにも時々流行もあるし人に依ては英人の樣なのを好む人もありますから總て絶對的には言へないのです、又佛蘭西人の名刺は英獨の中間位の大きさのを用ひるやうです、又中には肩書も澤山付ける人もありますから矢張一がいには言へません。

問　紙の寸法に就ては

答　寸法は別に定まつては居ない樣です。

問　書體は

答

書體は普通イタリックで其の外は好み次第です、一體佛蘭西人は英國風の細い長い字體を殊に名刺には好むやうです、それから又侯爵とか男爵とか云ふ身分の人は多く名を書かないで爵と苗字とを書く、卽ち侯爵西園寺と書くのである、それも本家や別家が何軒もあつて間違ひ易い時には侯爵公望西園寺と書くが、一軒しかない時には名を書かぬのが普通である、例へば侯爵西園寺は自分一人であると云ふ譯であろうと思ひます。

それから夫人の名刺には矢張り良人の姓を書くのです、是は支那とは少し違ふので西園寺夫人ならば「マダム」西園寺侯爵と書いて生れた家の姓は書かないのが普通です、所が中には假に私の妻が大岡さんからでも來て居る

とすると、侯爵西園寺夫人大岡家の生と云ふ事を下へ書くものもあります、又大岡家と云ふのが非常に名高い家であるか、然らざれば父が豪い人で例へばナポレオンの娘であるとか毛利公爵の娘であるとか云ふと其れを現す爲めに「ネー」(生れ)と云ふ字を書き添へるのもあるのです。

問 略字を書くことは如何なものですか

答 略字は多く書きます例へばP.P.C.又はF.とか云ふ風に種々書きます、是は符諜で極て居ますから下手にやると失策します。

問 名刺の折り方は

答 それは何處を折つてもよいが、まづ普通は右の下方を折るのです、然し又左方を少しく縦に折る人もあります、

問 冠婚葬祭によりて名刺の折り方の區別は

答 其の時の折り方もあるか知らぬが、詰り折るのは自分で行つたと云ふしるしである、然し又使でやつても折らせて置く人がない事もないが、それは自分で行つた樣に見せるのであるかも知れぬ、兎に角名刺を折る譯は自分で

行つたしるしにするのであると云ふ事を聞て居ます。それから極く厚い喪の時には縁の黒框を厚くし「ドミー」と云つて半喪にでもなると薄くする、其れ故其の黒框の厚いのと薄いので其の人の喪中の程度が判るから、餘り深い框の名刺を持つて居る人には倶樂部などで會つても、芝居を見に行かうとか一杯飲みに往かぬかなどゝ云ふものはない、薄い框なら遠慮の度が餘程少ないのです。

問 名刺の使用方は

答 知らぬ人に紹介人があつて知り合になると二三日内には訪問するのです、自身に行かざるも名刺は必らずおく

るのです、汽車などで知りもしない人に直接自分の名刺を與へ先の名刺を請求するなどは日本風と思ひます、西洋ではさういふ事にあつた事はありません。

夫れから夫婦に名刺を送る時には二枚の名刺を一所に一つの狀袋に入れてやるもかまわぬやうです、袋の上へは二人の名或は一人の名を書いてやる事もあるのです、二人の名を書くといふても只 Madame et Monsieur 某と書くのです。

問 名の略字は失禮に當ると云ふ事を聞きましたが如何ですか

答

そう云ふ事はありますまゐ澤山に名のある人は到底書き切る事は出來んのです。

問　紙質の事は如何でしやう

答　是も習慣だが英人や佛人は多く薄いのを使ひ獨逸では厚いのを用ひられる、又人に依つては土の這入つた厚いのを使ふのもあります是は詰り儉約の關係です、又銅板に刻つたのと植字とあるが是等は別にどうと云ふことはないのです。

問　宿所は何れに書くのですか

答　宿所は通常表へ入れるが、國務大臣と云ふやうな人のには書かないのです、裏へ書いたのは無い樣に思ひます。

問　名刺の緣に金などつける事は如何なものです。

答　昔はあつたか知らぬが今は有りません、夜食の時に席へ置く札などには金が着いて居るがそれも近來は極く洒落れた方では札を置くことは流行しません。

訪問

問

訪問毎に名刺を差し出すのが禮ですか。

答 幾度も行つて知れて居る家ならば名刺を出すには及ばぬが、それも夜食にでも呼ばれた後の訪問の時には是非名刺を出さねばならぬ、さうでないと折角禮に行つても無駄となつてしまうから。

問 訪問の時刻は

答 マア巴里の普通の習慣では午後の三時から六時までの間を以て訪問の時として居る、又特に時刻をきめて居る人もある、それは何時頃を極めとして居るかと云ふと、矢

張り午後三時から六時或は五時から六時半と云ふ樣な工合です、二時より前に訪問する事は先づ無禮の樣になつて居る、なぜならば晝飯の客などがあつて、それがまだ歸らぬ時などあるからです、だから正式の訪問の時刻と云はゞ三時から六時の間です、尤も用事があつて行くならば兩方の都合上であるから朝早く寢床などで會ふ事もある、又それほど親しい間柄でなくても「失禮」だが起るまでに來て呉れゝば會ふ」と云ふ樣な約束をする事もある、それ等は隨分立派な人でもやるので其の邊の工合はなか〳〵淡白なものです、

問 訪問日は何曜がよくて、何曜日にはいけぬと云ふ樣なき

まりでもありますか

答 昔は家に依て金曜日を忌むと云ふ樣な習慣もあつたさうだが、今はさう云ふことはないやうです。

問 訪問の時の服裝はいかゞです。

答 訪問の時の服は「フロックコート」で手袋の色も黑は無論の事鼠色もいけません、其の他の色合の光つた革のものを用ひます、夏などは薄い揉革のを用ゆるが、其れも、私が大岡さんの所へ行くとか大岡さんが私の所へ來るとか云ふ時は差支もないが實は略式である、大岡夫人に夜食

に呼ばれて其の挨拶に行く時などには光つた革のが正式なのです、然し實際はそれ迄に堅くやつてる人ばかりもありませんが、まづさう心得て居れば間違はありません、それから「モーニング」も代用します、又用事で行くならば背廣でも何でも少しも構はない、例へば國務大臣の面會日に會ひに行くに背廣で行くのもある、國に依づてはさう行かぬかもしれぬが、私の知てる所では大抵構はぬと思ひます。

問 饗應を受けたる後訪問する時の服裝は。

答 それは訪問中でもチョット正式になるので「フロックコ

ート」を用ゆるのです。

問 會話の時間は大抵何の位がよいのですか

答 極く懇意とか又親しい友人ならば別ですが普通の無沙汰見舞に行く時は漸く十五分か二十分で、三十分も居ると云ふ人はめつたにありません、併し餘り短かいと是れも無禮になるので日本人とは反對です、日本人では餘り長く居ると嫌がるが、あちらでは長く居るのを敬禮と思ふ人もあるやうです。

問 初めて訪問する時には。

答 其の時は無論何所かで引き合されて知己になつて名刺を送つて置いて再び行つて會ふので、決して突然訪問することはない、又行つても會はぬのが通例です、然し斯う云ふ慈善の爲めにするとか、斯う云ふ企てがあるから這入つて呉れとか云ふのは別で、其の際には趣意書でも持つて行く樣な譯だが、さうでなくて友達になる意味から來るとなか〳〵嚴重である、例へば極く堅くるしい話だが今日茲で大岡さんの紹介で貴君と知己になつて直ぐ一所に何所かへ行く途中、若し貴君が他人に横面でも喰らはされゝば吾輩は何しても貴君を保護しなければならぬ義務を生ずるのである、だから氣心も知らないで無

暗に知己を作ることは出來るものでない、もし其の際保護もせずに逃げ去りでもしたら彼奴はと云つて社會から決して許さぬことになつて居ます。

問　紹介狀持參にて訪問する時は

答　それは斯う云ふ紹介狀があるが何日頃伺つたら會へるかと云ふて、其れを置いて歸へるのが普通です、さうすると向ふから此間は御出下さつて難有い就ては何日の何時に御出で下さいと云ふ返事をよこすのです尤も身分に依ては其の時直ぐでも會へないことはない、又先方から出て來ることもあるが極く禮式の上から云へば、自分

の名刺と紹介狀とを置いて歸り、向ふの返事を待つてから改めて行くのがよい。

問　訪問の時名刺を二枚出す必要がありますか

答　夜食の禮などに行つた時又は無沙汰でもしたと云ふ時には、先方の夫婦に宛てゝ必らず二枚置いて歸ることに極つて居ます。

問　それは一枚出すは失禮に當ると云ふ譯ですか。

答　失禮でもないが一枚なれば主人にやることになる。

問　夫婦連れ立て訪問する時は。

答　其の時は一人で一枚づゝ都合二枚出すのが原則です。

問　訪問日は通常如何に定むるのですか。

答　普通は案内狀を出すのです、矢張り夜食の案内狀の樣に何日何時には在宅でありますと云ふことを書いて案内狀と同樣に出すのです、其れに對しては行つても行かなくても勝手です、案内狀の表には唯在宅時間丈しか書いてない、又或は何日何時に茶を飲むであらうとか、何日何

時若くは第三日曜を以て「マダム」誰は宅に居るであらうと書くのです、尤も知己の間ならそんな事をせずに何日に極めたからと云ふて會つた時に口で云ふか、或は印刷したものでなく手紙の中に書いてやるとか、又は名刺の下へ書いて其れを普通の狀袋に入れて送るとか、其の仕方は時々に依て違ひ又流行もありまして一樣には行かぬが、正式と云ふと初めに曰つた樣な次第です。

問　弔詞祝詞を述べに行く時は必らず應接間に通り面會の上述ぶるを禮としますか、又は玄關先にて述べて歸つても宜敷いですか。

答

弔詞や祝詞を述べに行つて主人に會へば、主人の招した所で數尺前に立つて、例へば何々を御祝ひするとか又は御前さんの御父さんの誰の事を御祝ひするとか云ふのです、見舞でも弔詞でもさうです又主人に會はないで玄關から歸るのであれば、必らず名刺へ用向を書くので決して取次に口上を言つて傳へて貰ふと言ふ事はなくそれは無禮となつて居るのです、日本では總理大臣の所へ行つても取次に斯う云つて呉れろと傳言を頼むがさう云ふ事はしない、是も佛獨位の話で外は知りませんが何所もさうであらうと思ひます、餘程懇意の家で門番でも居れば、斯う云ひ傳へて置いて呉れと云ふこともあるがそれでも名刺の裏へ書いて置くのが普通です、ところで

斯ふ云ふ事があるのです、佛蘭西では門番と云ふ者は大に認められて居るので一つの門があつて其の内に幾家族も住んで居る、それで門番に斯う云ふ事を托して置いたとか云ふことが能くある、其の點に付ては寧ろ其の家の婢僕よりも門番の方が認められて居るやうである、民法等でも斯う云ふ時の事は門番に言ふて置いたとか、門番が證據人になるとか云ふ事が屢々ある、奉公人も證人に出るがさう云ふ手紙を預かつて置くとか云ふことはないのであつて、詰り門番の方が責任が重いのである。

問　應接の態度は

答

外交の談判等には日光を背にして向ふの顔を能く見て、此方の顔の能く見えない樣にして會見したとか云ふことが昔の小說にあるが、今日はそんなことは仕ない極く手輕いのです、唯相手が立つてるのに自分が腰を掛けるとか、或は相手が發言して居る中に遮て此方から話をしたりするのは失禮なのです、此の事は丁度日本とは反對なのです、日本の昔風で云ふと立つて居る方が失禮で座つて居る方が敬意を表することになつて居ます、其れに就いて斯う言ふ事がありました、或る國の公使と會つた時だつたが、私は腰を掛けて居ると向ふは其の前へ來て立つて話をするから、私は向ふのフロックコートを引張つて腰をかけさせて話をつゞけた、さうすると是を見て

居た或る立派な人が後で私に、今日は好い心持ちでしたと云ふから何かと聞いたら、先刻某公使が貴殿に向づて立ちながら話をして居たのを、無理に引張つて座らせなすつたがあゝ行かなければならぬと言ふた、私は驚いたが思へば幸であつた、何せならば吾が座つて居て向ふの立つて居たのを引き据ゑたから賞められたが、反對に向ふの立つて居たのに此方から腰掛けたら、何の弱腰がと云はれるのであつた、其の人は正しく私が禮を盡したのを意張つたのだと誤解したのです。

紹介

問

他人を紹介する事に就きまして御話を願ひます。

答

人を紹介するには、一寸と云ふと或る人の家で會つたとか、汽車の中で會つたとかした時に、決して自分から紹介してやらうなどゝは云ふものでない、日本では兎角知りもしない人を紹介する風がある、先日も汽車に乘つたら或る人が互に名さへ知らぬ外國人を連れて來て紹介したが、あゝ云ふことは決してあちらではしない、責任が重いから紹介してくれと、云はれて紹介して若しも其の人に對して無禮でもあると、西洋であつたら決鬪でもしなければならぬ場合にもなるだらう、其れで、有から自分から誰に紹介して上げませうなどゝ云ふことは特別の場

合を除くの外……人を紹介してやらうと誘ふことは決してないのである、例へば大岡さんからあなたに、私が紹介して貰はうと思へば、是れは能い機會であるから紹介して下さいと云ふ、すると大抵相手が知り合の仲で大丈夫だと思へば、直ぐに宜しいと云つてお近附にして下さいと云つて引合はせるが、それほどでない日本で云へば所謂切口上で言を云ふ樣な間柄ならば、大抵あれは紹介しても差支は御座いますまいか御迷惑でございませんかなどゝ問ふ、さうしてあゝ宜しうございます、あたなの御紹介ならばと云ふことで知り合ひになるのである、人を紹介すると云ふことは非常に重いことになつて居るのです、さてさうして紹介して貰つたならば、其人は翌日

にも名刺を持つて門まで行かなければならぬ、又受けた方からも、モー一つ云ふと紹介して呉れた人にも名刺をやる、紹介して呉れた人には其位の間柄だから必ずしもやらぬでもよいが併し知己にされた人には是非やらねばならぬ。

問 手紙での紹介は

答 手紙の紹介もそれと同じであつて、例へばあなたが私の所へ來て、大岡さんにどうか紹介狀を書いて貰ひたいと云ふと、宜しいと云つてそれは必ず披封にしてやるのです、是は紹介狀に限らず人に手紙を頼む時分でも披封の

手紙でなければ頼めないことになつて居るのです、特別に斯う云ふ譯で封をしますからと云ふて封をする時には、其の前に讀み聽せてから封をするのが方式であります、さうしてあなたに紹介狀を渡して置いて直ぐ別に、紹介狀を斯う云ふ人に渡して置いたから持參したら會つてやつて呉れといふ事を大岡さんに向けて直接出すのです、かうすると二重の手數がかゝりますが先づ是が正式です、日本では多く本人も紹介狀の渡しぎりで向へは何とも沙汰なしです、そして當人が持て來なければ自分が紹介されて居る事もしらぬのです。

問 紹介狀に他の事柄を書き入れても差支へはないのです

か。

答　それは一向構はないが、其の人に渡すのに披封で渡すか、然らざれば目の前で封をするから書くことは差支へはない。

問　紹介者の責任は。

答　紹介した人の責任は、例へば紹介狀を持つて行つて先方に無禮でも加へて頭でも打つたと言へば、紹介した人は氣の毒であるから假令向ふから決鬪を申込まれても仕方がない、貴方から紹介して來たが斯う云ふ事をしたと

か、或は金錢でも詐取されたなどゝ云ふ事があれば法律上の事は兎も角も個人の德義として責に任せなければならん、併し右に云ふ所は紳士間の知り合になる卽ち交りを結ぶとの紹介である、商賣人などの取引上の紹介とか、又は公事に關するとかいふ例へば慈善事業の寄附金を募るとでもいふやうな事は又別である。

服裝

問　紳士の服裝の事につきて種々御話を伺ひたう御座います。

答

紳士の服裝と云つて別にありませぬ、軍服を召さない時には天子樣でも同じ事です、矢張りフロックコート、ジャケットか脊廣といふやうなものです、それから勞働者の服は別で日本で云ふと印半纏とも云ふべきものでせうブルーズ、タブリエと云つて學校の小供の着て居るやうなのです、此の勞働者の服を除けば皆同じ事です、これに就て話がある、全體佛蘭西では大統領の大禮服といふものはない、然るに或る時大統領にも大禮服を着せるがよいとの議が起つた事がある、其時ある代議士にて勞働者を代表する者より、大統領の大禮服はブルーズにするがよい平民主義にかなつて居ると云ふて建白をした事を記憶して居ます、扨て其内脊廣は家で仕事して居る時に

着るとか、或は散歩する時旅行する時などに着て午後の訪問にはフロックコートを着、又夜食に呼ばれた時は小禮服にきまつて居るのです、又小禮服には白手袋白襟ときまつて居ます、併しある社會で懇意の間柄では平日のフロックコートのズボン卽ち縞のズボンの上に燕尾服だけ着て行く事もあります、それから芝居へ行くとか料理屋へ行く時などはスモーキンと云つて小禮服の尻を切つたやうなのを着る、勿論芝居は小禮服なれども棧敷により又は同行人により(例へばベイニョワール(Baignoir)といふ室へ入る時など)それから葬式の供をする場合はフロックコートで餘りケバ〳〵した物は着けないがズボンは縞でよい、自分が喪に服するのは別だが、さうでない

のは普通フロックコート靴は艶消しです

問　舞踏の時には

答　舞踏の時にも無論小禮服です、そして靴は塗靴です。

問　人に接見する時には。

答　接見日に面會する時は矢張りフロックコートです、唯普通自分の書齊にでも通して接見する時は平常着の儘であるが、前に約束でもあつて訪問を受ける時はフロックコートを着るのです、それから午餐はフロックコート、晩

餐は燕尾服又はスモーキン、此のスモーキンには返り裏のあるのが普通ですが無いのもあります、又此のスモーキンを着るときは白チョッキで黑襟です、一體チョッキはスモーキンは白、燕尾服は白でないのが原則ですが反對にやる人もあります。

問　帽子や靴などには何う云ふ區別がありますか。

答　小禮服の時の帽子はクラックと云ふて疊めるのを被ぶるが、スモーキンの時には普通日本で云ふ禮帽でも中折れでもなんでも構はない。

問

靴や襟飾の色などには別段きまりはありませんか。

答 靴の色や襟飾の色は別にきまつて居ないやうであるが、原則から云へば小禮服には白襟艶のある黒靴、スモーキンの時は襟は黒のヂプロマットと名くる結びたる襟、靴は何んでもよい、赤い靴でもよいフロックコートを着たる時は襟はなんでもよい、靴はまづ黒が普通である、全體靴の種類でも凡七八種もある、之に狩獵旅行又は船中などで用ひるものを數へたならば殆んど二三十種にも及ぶだらうと思ふ。

問 祝事に呼ばれた時は

答 別に是れと云ふきまりはないが、祝事又は祭典などの時は朝廷でなくも大禮服を用ひる事があると思ふ勿論小禮服フロックコート等をも着るのであるが何れも皆場合によるのである。

問 ピンば如何いふものでせう。

答 葬式の供でもする時に、餘り立派なダイヤモンドのギラ〳〵光つたのを挿すとか、又珊瑚樹の赤いのを挿すとかは、會葬する當人にもよるが兎に角葬式の供をする位の關係ある人だから遠慮するのがよい、併し必ずしも供を

する人がダイヤモンドのピンを挿したと云つて惡口も言はれないのである、其の邊の工合は日本でも同じです。

問 外套は室内で着て居ても能いのでせうか。

答 家の内へ這入つたら必ず脱ぐのが原則です、又庭へ出れば着るのです、日本で園遊會の時に外套を着て居ると失禮だと云ふ人もありますが、家の内なれば間が溫めてあるからよいが、家の外では空氣に抵抗する譯であるから許すのが當然です、併し又ある場合には室内に入つても外套のまゝで居るのは、早く歸ると云ふ印であるといふて居る人もある、是は或はあまり上等でない部分での習

慣ならんと考へます。

問 船の中では如何です

答 船中では自分の室を出れば着てよい、勿論食堂とか讀書室とか婦人なども雜居する處では脱ぐのです、甲板でも散歩する時は寒いから無論着るのである、家の内では相手によるが、甚だ失禮ですが風を引いて居りますから外套を着て居りますと云つても失禮ではないので、さう云ふ事になると西洋では餘程寛です。

問 帽子に就ては。

答

帽子は人の家へ這入れば直ぐ取るのですが手に持て居るのです、訪問して會つても、主人が手に持て居るのを取て置て呉れゝば格別、さうでなくて手に持て居るのを置く時には下へ置くのです、其れを主人が其所へ置てはいけませぬと云つて取つてテーブルの上へ置いて呉れることもあるが、自分で上へ置くと云ふ樣なことはしない、極く丁寧に言へば手に持つて居るので、其の次はチョット自分の椅子の蔭へ置くとかするのである、それからマア佛蘭西で言へば、大統領の官邸へ行つたとか或は倶樂部等へ行つても帽子を掛けて置く所はない、外套と杖は預つて呉れるが帽子は持つて居るにきまつて居るから

決して預らない、巴里で私の常に行つた倶樂部は藝人倶樂部(Cercle d'Artiste)と云ふのであるが、今の英國皇帝なども名譽會員で歐州大陸では第一とも云ふべき倶樂部であるが、其所では外套でも杖でも包でも預るが帽子ばかりは決して預らない、倶樂部の中では皆帽子を被つて食事又は骨牌などをして居た。

問

ステッキは何處へ置くのが普通ですか

答

ステッキは馬車の内、又は玄關へ置くのですが其れも構はない人もある、是は日本での事であるが、私が外務大臣をして居つた時分、各國の公使には誰一人ステッキを持

つて座敷へ這入つて來る者はなかつたが、領事はどの領事も不思議にステッキを持つて這入つて來た事を覺えて居る。

手紙

問 手紙の紙質インキの色などには何かきまりがありますか

答 それは能く知らぬが、インキの色は公式には矢張り黑であらうと思ふ、赤とか紫などは婦人子供などの手紙に以前よくあつたやうに記憶する、又男子の手紙にも度々見

た事はある、要するに時の流行に從つて差支はありますまい。

問 その赤や青のインキを使ふのは親密な間柄に限るのですか。

答 さうばかりではない樣です、添書などを持つて來たのに赤インキで書いたのもある、それは能く研究しなかつたが多分差支はないであらうと思ひます。

問 紙の大さは

答

それも時の流行のやうで一種名刺の小さいのを好むやうなものであらうか、英吉利人から來る手紙は小さい、名刺など丶同じく佛蘭西人でも隨分小さいのもある、是も矢張り儀式張つた方には餘り小さ過ぎるのもをかしいでせう、大抵皇帝の公使親任狀と云ふものは大きな物であるが特別の手紙には小さいのもある、であるから是も一概には言へないが、マア事務に關する手紙が大きくつて、平生の交際の方が小さいのでせう、つまり是も流行です。

饗宴

問

晩餐會、夜會、又は茶話會などの時刻、接待の方法案内狀を出す事などは如何で御座いますか。

答

晩餐會等の案内狀は、凡て必らず遲くも一週間前に先方に出すのが普通である、期日が迫つてから出すと云ふ事は特別の事故のある時に限る、又晩餐には其の他の舞踏會や茶話會等と違つて、其の行く時刻を嚴守しなければならない。

晩餐の時刻は西洋大陸では追々遲くなるやうである、以前は七時より七時半頃が普通であつたのが近年は七時半より八時頃になつた、八時半の招きも澤山にある、能く西洋人が云ふが晩餐に呼ばれた時には遲參するのも無

論無禮であるが、然し早過ぎるのも矢張り無禮であ、る、何となれば其れが爲めに大いに主人の迷惑になることがあるからで、例へば未だ座敷に火が點いてゐないのに、客が來た爲めに狼狽すると云ふやうな事です、日本でも客の時刻は嚴守する樣になしたいと思ひます。婦人の手を引くことは、主人側で豫め能く組合せて置いて、貴下は誰の手を引いて呉れといふやうにするのです、若し手を引く人が互に知らぬ人であると……此の場合は外交官の外はあまりない、如何となれば夫れ相當の位地の人を合はせるから……外交官などになると多くの宴會に出るので知らない婦人の手を引くことが間々ある、さう云ふ場合には多く男子の方から其の婦人に紹介してもらふ

のが普通です、其の手の引き方は男子の右の手で婦人の左の手を引く、日本などではさう遣つて居る、佛蘭西でも晩餐の時は此の格でやる家もあるが平常は男子の左の手で婦人の右の手を引くのです。

其れから主婦の手を引くのは、來客中の上席の人が引くことになつて居る、又正客の夫人の手は主人が引くことになつて居る、そうして其人を主人の右に座らせ、男子の正客を主婦の右に座らせる、詰りいつでも右の方が上席と云ふ順序で段々座つて行くのです。まづ其れが原則でありますが、けれども其の中に互に懇意な人があつたり、又あまり仲のよくない人があつたりする時には、主人側で氣をきかして仲の好い人同志を隣り合はせ仲の惡い人

は遠くに離して着席させることである、此の席の設け方は主人の大に困難する所で其れが爲め晩餐會を一晩で仕てしまふ事が出來ない場合もあります。

問　其の席順は主に客の社會上の地位に依て定めるのでありますか。

答　是に就ても主人の困難を感じる事ですが先づ其の樣な具合です。

喫煙

問　喫煙に關する心得を承はりたう御座います。

答　煙草を飲むことはマア其の原則から言へば、婦人の前を憚ることは幾んど一般の例になつて居る、其れ故夜會などでも又夜會の後などでも別に喫煙室の設があつて、男子は其處で煙草を喫むことになつて居ます、是は啻に煙草を飲む許りではない、男子は男子丈で談話をする便宜にもなつて居るので、又た婦人の方から言へば男子の煙草を喫む間は我々の休暇中であると云ふ樣な話もあるが卽ち男子を混へず婦人同志で勝手な事をいふとの意味と思ふ、要するに喫煙は婦人の前では憚かることが原則となつて居ます、其れから男子でも嫌の人の所では其

人の許可を得て喫むか或は成るべく避くるのが好いが汽車の中とか乘り合ひの電車とか……電車に限らず總て乘り合ひの車の中などで、婦人が隣に居る時は必らずしも喫まぬとも限りませんが、喫む時は窓を開けて其の煙を外に吹くとか或は其の許可を得て喫むとか云ふ樣なことは、所謂サボアール、ヴイヴルで紳士の遣ることゝ遣らない事とは其處から出て來るので卽ち他人の厭ふ事は遠慮すると云ふのです。

乍併です是も程度で巴里等の例で曰て見ると中等社會の極く固苦しい家では座敷内の他人の混て居る所で煙草を喫むことは非常に罪惡の如く思つて居る、然るに却て貴族大家などに一向構はぬ家もある、又伯林など今日

はしらぬが以前は餘程寛であつた現に皇族の婦人の前で食後に喫むのを見たことがある。

又婦人も時には喫むことがある是は多くは紙卷で葉卷は喫まない、然しゼネバ邊りでは葉卷を喫む婦人もあるといふ事を耳にした事もある、其れから佛蘭西の南方の漁民などは男女に限らずブリユル、ネー卽ち鼻燒きといふ意味で土で製へた短かい鼻を燒きそうなパイプに煙草を詰め込んで一般に喫んで居ます、煙草の話に就て一つの落話がある『或る人が初めて結婚した、そして翌日の朝餐になつて其の新婚の妻君が向側に座つて主人が此側に座つて所謂差し向ひと云ふことになつた、所が妻君も何か物足らぬと云ふ樣な顏をして居る、亭主の方でも

矢張り同じ様な顔をして居る、さて食事も濟んだ所で亭主の方からまづ口を切つて「御前と初めて婚姻をしたことであるから自分も控へて遠慮はして居るが、自から夫婦の間には互の義務と云ふものもあるからと云ふと、新夫人は眞赤な顔をして無論其れは私も心得て居りますと云ふたゞすると亭主は其れぢやと云ふて一大煙管を出してスパ〳〵吸ひ初めたそうである」亦以て婦人の前に喫烟を憚る事を知るべしである。

喪

問 喪の問は

答 喪の中は餘程愼しむのです、殊に初めの百日か半年程の間は殊に遠慮するので其れは日本と略似て居ます、喪の期間の事は昔し聞いた事もあつたが忘れました、芝居にもゆかず又夜會にも出ず勿論自分の家ではさう云ふ催しなどはしませぬ、たとひ交際季節が來ても喪にある間は何にも爲ません、從つて娯樂を目的とする場所などには出入りしないことになつて居る、其の他宗教的の事に付ても種々あるかも知れぬが其れは私は一向知りません。

流行

問　一般の流行と申す事に就て御話を伺ひたいものです。

答　流行と云ふことは所謂人意に適すると否とで終始するのであるは勿論であるが、此の流行といふ事は歐人はよほど重い事に見て居る、流行を解し得、捕へ得ると云ふ事は人生の大事である、流行は衣服飲食より詩文書畫音樂は勿論學問のしやう商賣のしやうから政事のとりやう總て之を免かるゝものはない、此の話はあまりメタフイジツク的になつて面白くもなし又た長くなるから止めやうが、一寸言ふて見ると衣服の流行は男女向き共毎年仕立屋がよつて相談してきめると云ふ事である、男子の

高帽の形などは三四ヶ月目に變る、是も帽子屋が決めて仕入れるといふ事である、又どこの芝居で何と云ふ俳優がどう云ふ衣服を着たとか、何國の君主が斯う云ふ衣服を着たとか云ふ樣なことから起るのもある、又那翁三世の時代には宮中から婦人の流行が大分に出たといふ事も聞いて居る、昔し唐の大宗の時民間の婦人の髻が高くなつたのは宮女を眞似るのであると言つて諫を上るものがあつた、すると大宗はそれでは宮中の女を皆尼にするのかといつたといふ話があるがいつも人情は變らぬものである、其れから又流行(Mode)倶樂部と云ふ樣なものが處々にある、是には高襟や金滿家が集つて居る、私の知つてる露西亞人で近年まで「ニイス」といふ處の流行倶樂

部の副總裁ビスプレシダンをやつて居つた人がある、其れから色々の話を聞て趣味を感じた事もあつたが、其人の話に「其頃は露西亞人と亞米利加人とが一番巴里の流行(婦人服)を好む、そして大金を擲て其の季々の衣服を巴里にて調製し猶又自國に於て高價なる税金を拂て、各々自國のサロンで自分もよろこび人にも羨ましがらせて居るが、其實是は巴里の上流社會の流行服ではなくて亞米利加向としての巴里流行、露國向としての巴里流行である、如此こしらへてあるのであつて眞の巴里流行物は兩國の婦人ともにあまり喜ばれぬ」と云ふ話をした、是は殆んど三十年程昔しの事である今日は亦大に趣を異にして居るであらうと考へます。

それから或る音樂作者の大家がこう云ふ事をいふた事がある、新たに樂譜を作る苦勞を一ヶ月とすれば、之を流行させる苦勞は一ヶ年かゝるといふ事がある、勿論是は世を憤るより來つた言であるが要するに人爲で以て流行させるのも亦非常に有力である、現に彼のオートモビルだの自轉車などに就て見ても如何に其會社が務めて居るか其は非常である、併しながら或るものが流行して終に天下を風靡するに至るといふのも自ら其物自身に價値があるので之に加ふるに人爲を用ゐたといふに過ぎない矢張り自然には背て居ないのでありませう。

西園寺侯 西洋禮式談 終

附錄

西園寺侯

編者述

日露戰爭後の日本を引き受けて、戰後經營の難局に當られたる西園寺首相は抑も如何なる人であらうか、本書によりて侯の禮式談を讀んだ者は、更に侯の經歷、人物に就て多く知らんと欲するであらう、依て編者は編者の知れる概略を記述しやうと思ふ、素より侯を評論するものではない、品隲するものでもない、只有りのまゝの侯を紹介するに過ぎぬ。

少年時代

嘉永二年卽ち千八百四十九年は如何なる時であつたら

うか、日本では維新政變の搖藍の作られつゝあつた時代、支那では洪氏憑氏の亂起り、四百餘州亂麻の如く、歐州は所謂革命時代で、今日の伊太利が建國の最初の基礎を横へた際であつた、革命的氣運は世界中何處にも滿ち〳〵て居たのである、侯は實に其の年の十月我維新革命の燒點たりし京都の邸に生れた、德大寺家の出で今の侍從長には弟、住友吉右衛門氏には兄に當り故ありて西園寺家を繼いだのである。

西園寺家は三條德大寺の二家と共に鎌足公十一代の孫仁義公から出たので、公卿の中でも最も高貴な家柄であるから、若し凡庸な人物ならば詩歌管弦に耽つて居ても何等の差し支もなかつたのである、然し天資聰明加ふる

に來るべき大政變の氣運に接した侯ペルリの來朝以來、下田條約、櫻田の變、公武一致、青蓮院宮の幽閉なんど續々として起る幾多の事變に痛くも若き頭惱を刺戟された侯は、十二三歳になつて早くも慷慨家となり、國政を論じ武術を講じ、年と共に王政復古の念愈々盛んになつた、十三歳の時初めて勤番に出で五六ヶ月經てから近習に進み、三條公や岩倉公等と一緒に宿直をされたこともあつたさうな。

元治元年七月十七日は丁度長州勢が禁闕を犯した時で京都は修羅の巷と變じた、侯は其の時十六歳侯の邸宅は有名な蛤御門に近いので、恰も戰場の眞中となり、砲彈雨霰の如く降つて來る、其れ故侯は止むを得ず隣の邸の塀

を破つて日の御門から漸つと參内したと云ふ話である、侯の少年時代は斯くの如き内に過ぎ去り、世は走馬燈の如くに幾變轉して頓て維新の時代となつた。

維新の政變

慶應三年十二月二十日侯は突然宮中から召されて參與の職を命ぜられた、翌年卽ち明治元年正月の事である、伏見の戰開始の急報が宮闕に達した時、參與の人々が集つて評議をすると、或る人が此の戰は私鬪にせねば他日朝廷の爲めに惡からうと言ふた、すると其れを聞いた若年の侯は大に反對して直ちに「此の戰を私鬪とする樣ならば天下の大事は去つてしまう」と論じた、其れを岩倉公が

側で聞いて居たが嬉しさの余りに「小僧能く見た此の戰を私鬪にしてはどうもならん」と云ふたそうな、後に侯の意見の果して的中した事が知れた。

正月の四日に侯は山陰道鎭撫總督を命ぜられ、薩長兩藩の兵二大隊を率ひて最初丹波に入り、一戰も交ねないで龜山城を降し、更らに進んで鳥取に入り同藩の兵三大隊を合せて松江に入つた、松江藩は德川家に最も緣故が深いから如何なる事變が起るかと思はれた所、藩主なる松平出羽守は大に恭順の意を表して侯を出迎へ、禮を盡して城を明け渡したので事なく濟み三月になつて京に歸つた、侯は時に年二十歲の靑年であつた。

それから越ゐて四月五日には東山道第二軍總督となり、

更に北國鎮撫使を命ぜられた、後會津征討越後口總督に任ぜられ、仁和寺の宮の大參謀となつて越後方面に向ひ長岡、會津の戰爭にも出て到る處大功を奏した、十月になつてから新潟の知事を命ぜられたが直きに辭して一書生となり豫て志望して居た洋行の準備に着手された。

侯の洋行

時は明治三年の十月侯は佛國留學を仰付けられ直ちに出發した、當時歐洲は恰も普佛戰爭の眞最中、勝ち誇つた る普軍が巴里を重圍の內に陷れた時、伊太利半島では羅馬は最早サルヂニヤ政府に歸し法王領は一のヴアチカン宮に縮められた時である、今か大政變、大混亂の僅かに

終局した日本を出でゝ砲烟漲る歐洲の天地に向つた侯が胸中の感慨は果して何んなであつたらうか。

翌年三月彼のコンミューン暴動の起つた頃、丁度侯は巴里の學校に居られたので、宮殿や博物館等の兵燹に罹る光景、慘憺たる市街戰の實況は悉く目擊されたのである。

以來約十年の星霜を巴里の學舍に費し十三年十月丁度伊藤侯が參事院議長をして居た時歸朝し翌年參事院議官補に任ぜられた、是れ侯の伊藤侯と接近した初めである、十五年三月伊藤侯が憲法取調べの爲歐洲に行つた時侯は同行し十六年に歸朝した、十七年七月になつて侯爵を授けられた。

外交官

侯が外交官となつたのは明治十八年二月で、實に維納駐劄全權公使となつたのが其の初めである、二十年六月には獨逸公使となり白耳義公使をも兼ねて伯林に駐在して居た、時の獨逸帝國宰相兼外相たるビスマルクとは特に親密の交際を結び伯林會議の自慢話等は屢々聞かされた一人である、其の年の九月には臨時特命全權大臣として羅馬に赴き、ヴアチカンに法王レオ十三世を訪ふた。其の時面白い話がある、侯が謁見を求め樣とすると、傍に居る宮內官が侯に向つて、謁見の際には劍と帽子と手袋とを脫がねばならぬと注意した、そこで侯は答へて「余は法王に對するのは恰も列國の帝王に對すると同じく思ふので、其れ故大禮服を着して禮義を盡さうと思ふので

ある、然るに今內規の爲めに劍と帽等を脫るのは禮服の裝飾を脫る樣なものであるが何うであらうかと曰ふた、官人はそれを聞いて然らば差支はないと云ふたので、劍と帽を捨てず、手袋を脫つて使命を果したさうである、侯のやり口は萬事先づ斯んな風である。

文部大臣

斯くて廿四年八月に歸朝し翌月賞勳局總裁に任せられ二十六年四月法典調査會の設けらるゝや伊藤侯總裁の下に侯は副總裁となつた、同年十一月には貴族院副議長となり、翌年五月には樞密院顧問官となり、廿七年八月二十日卽ち日淸戰爭の開始後間もなく侯は重大なる外交

上の命を帶びて韓國に赴き一ヶ月程經て歸朝された、十月になつてから井上毅氏の後を繼で文部大臣となつた、是れ侯が國務大臣となつた最初である。

外務大臣

二十八年日清媾和條約も調印を了り、三國干涉も遼東還附の件も一切濟んだ六月五日、陸奥外相は病氣の爲めに引き込んだので侯は外務大臣臨時代理となつた、千島艦事件の落着、遼東半島還附條約、太平洋西部に於ける日本と西班牙との境界線確定、京城の事變等も皆當時の主なる出來事である、廿九年五月第九議會の開會の後陸奥伯は辭職したので、侯は文部大臣と外務大臣とを兼任する

事になつた、然し僅か四ヶ月ばかりで伊藤內閣は總辭職となつたので、九月に野に下り再び佛國に遊學して大に殖民政策を研究された、其の當時の佛國外務大臣のアノトー氏とは特に親密の交際を結んださうである。

三十年十二月廿五日所謂松隈聯立內閣が、十一議會を解散すると同時に總辭職をしたので、翌三十一年一月中旬伊藤侯の第三次內閣の成立と共に、西園寺侯は入つて文部大臣となつたが在職僅かで病の爲めに辭職し、四月三十日椅子を外山正一氏に讓つた。

三十三年伊藤侯が政友會を組織した時の如き、園侯は病氣未だ全快しなかつたが、內部にて種々の建策をなし大に藤侯を助けた、其れが爲め同年十月二十七日藤侯の第

四次內閣卽ち政友會內閣の成ると同時に園侯は樞密院議長に任せられ、次で藤侯の病氣中、內閣總理大臣代理を命せられた。

三十四年の五月であつた、伊藤內閣は渡邊子との確執が原因で動搖し其の結果藤侯は遂に辭表を捧ぐるに至つたので、園侯は臨時兼任內閣總理大臣となり大藏大臣をも兼ねた、後繼內閣の組織に就ては西園寺內閣を望むものも多かつたが固く辭退されたので遂に桂內閣の成立を見るに至つた。

政友會總裁

丁度三十六年の七月であらう、第十八議會が閉會してか

ら間もなく、政友會の總裁たる藤侯は樞密院議長に親任せられ表面上政界を退いたので、園侯は入れ替りに樞府を去つて政友會の總裁となつた、時は恰も滿洲問題に關する日露の危機漸く切迫し、國論沸騰大政黨の活躍を要する際で此の新總裁を得た政友會も茲に漸く黨務を挽回し面目を改むる樣になつた、是れ實に園侯が政界に奮鬪的生涯を始むる第一歩なのである。

愈々日露開戰となるや侯の率ゆる政友會が進歩黨と提携して、如何に當局者の後援となり、議會に翼賛の實を擧げ、官民協力海內一致、遂に光輝ある空前の大捷を得るに至つたかは世人の能く知つてる所であらう、講和問題に關して桂內閣が國民の怨府となつて瓦解するや、大政黨

の首領たる侯は大命を奉じて新内閣を組織し、新日本の新時代に立つて戰後經營の重任を負ふ事となつた侯が如何に大手腕を振ふべきかは今後に見るべきものである。

侯と趣味

公人としての侯は概略上述の如くである、個人としての侯は如何であるかと云ふと、極めて多角的の才能と多方面の趣味とを持つて居る、されば文學藝術は素より、劇にも通じ、俳句もやり、詩も好き、書も上手、盆栽ならば商賣人も敵はぬ位、繪畫も、音樂も一として侯の嗜好に投せぬものはない、それに專問は法律であるが書物は極めて廣く

讀まれて居るから何事にも達識で、不用意に如何なる問を發しても必らず旨い答をされる、それだけ交際する人も多方面で官吏、政治家、新聞記者を初め美術家、盆栽家、文學者等常に門を出入する。

侯を訪問したものは、何人も侯の趣味の極めて高雅で、上品な事に氣が附くであらう、邸宅でも庭園でも應接間の裝飾でも毫も俗惡の氣がなく、何處迄も品よく、何處迄も瀟洒で多分の澁味を含蓄して居る事も判る、大島紬の袷に縮緬の兵兒帶をしめ、安樂椅子に寄つて悠然とシガーをくゆらしつゝ、靜かに客と應對されるのは應接間に於ける侯である、何人に向つても極く平民的で毫も貴族ぶる處なく、種々の問題を捕へて批評もする、議論もする、說

明もする、果ては輿に乘じて客と共にドッと大笑する事もある、それで一見極めて親しみ易い樣に思はれるが、又なか〳〵犯し難い處もある、是れ侯の侯たる所である。

侯と故紅葉山人

日本の貴族の內で侯位文學を解するものも少く、又侯程民間の文士を待遇する法を心得てるものも少ない、先年の事である、陛下が故三條實美公の嚴父實滿公の經歷を、帝室の某畵伯に命じて、十二卷の繪卷物に製られた時、公の生涯を叙すべき勅命が侯に下つた、そこで侯は聖意を拜承した後尾崎紅葉を推薦したが、當時山人は旣に病危篤で筆を執る事も出來ず程なく永眠したので、侯は止む

を得ず自から拜草して奉呈したと云ふ話である、

侯と故團十郎

侯は藝術の眞價を知つてる所から、俳優等をも極めて優待され、故團十郎等も大に景仰したのである、古い事だが侯が初めて團十郎と知己になつたのは侯が佛國から歸朝した時で例の光明寺三郎の紹介であつたさうな、當時團十郎は新宮町の小さな家に居たのであるが、侯は一向構はず時々遊びに出かけて劇道の發展改良に就て種々の話をされた、遂には二十年の四月侯の盡力で團十郎は陛下の御前で劇を演じ此の上なき名譽を得た、當時侯から贈つた秘藏の琵琶は今でも堀越家に殘つて居て非常

明もする、果ては輿に乘じて客と共にドッと大笑する事もある、それで一見極めて親しみ易い樣に思はれるが、又なか〳〵犯し難い處もある、是れ侯の侯たる所である。

侯と故紅葉山人

日本の貴族の內で侯位文學を解するものも少く、又侯程民間の文士を待遇する法を心得てるものも少ない、先年の事である、陛下が故三條實美公の嚴父實滿公の經歷を、帝室の某書伯に命じて、十二卷の繪卷物に製られた時、公の生涯を叙すべき勅命が侯に下つた、そこで侯は聖意を拜承した後尾崎紅葉を推薦したが、當時山人は既に病危篤で筆を執る事も出來ず程なく永眠したので、侯は止む

を得ず自から拜草して奉呈したと云ふ話である。

侯と故團十郎

侯は藝術の眞價を知つてる所から、俳優等をも極めて優待され故團十郎等も大に最負したのである、古い事だが侯が初めて團十郎と知已になつたのは、侯が佛國から歸朝した時で例の光明寺三郎の紹介であつたさうな、當時團十郎は新富町の小さな家に居たのであるが、侯は一向構はず時々遊びに出かけて劇道の發展改良に就て種々の話をされた、遂には二十年の四月侯の盡力で團十郎は陛下の御前で劇を演じ此の上なき名譽を得た、當時侯から贈つた秘藏の琵琶は今でも堀越家に殘つて居て非常

明治三十九年十一月五日印刷
明治三十九年十一月十三日發行

（正價金拾五錢）

編者　神東惇

發行者　東京市京橋區北槇町貳番地　篠崎純吉

印刷者　東京市日本橋區上槇町十六番地　富山利三郎

富山印刷所印刷

發行所　東京市京橋區北槇町貳番地　電話本局二六二三番　參文舍

發行所　大阪市東區南本町四丁目　電話東三三八四番　積文社

不許複製

神東惇著譯目錄

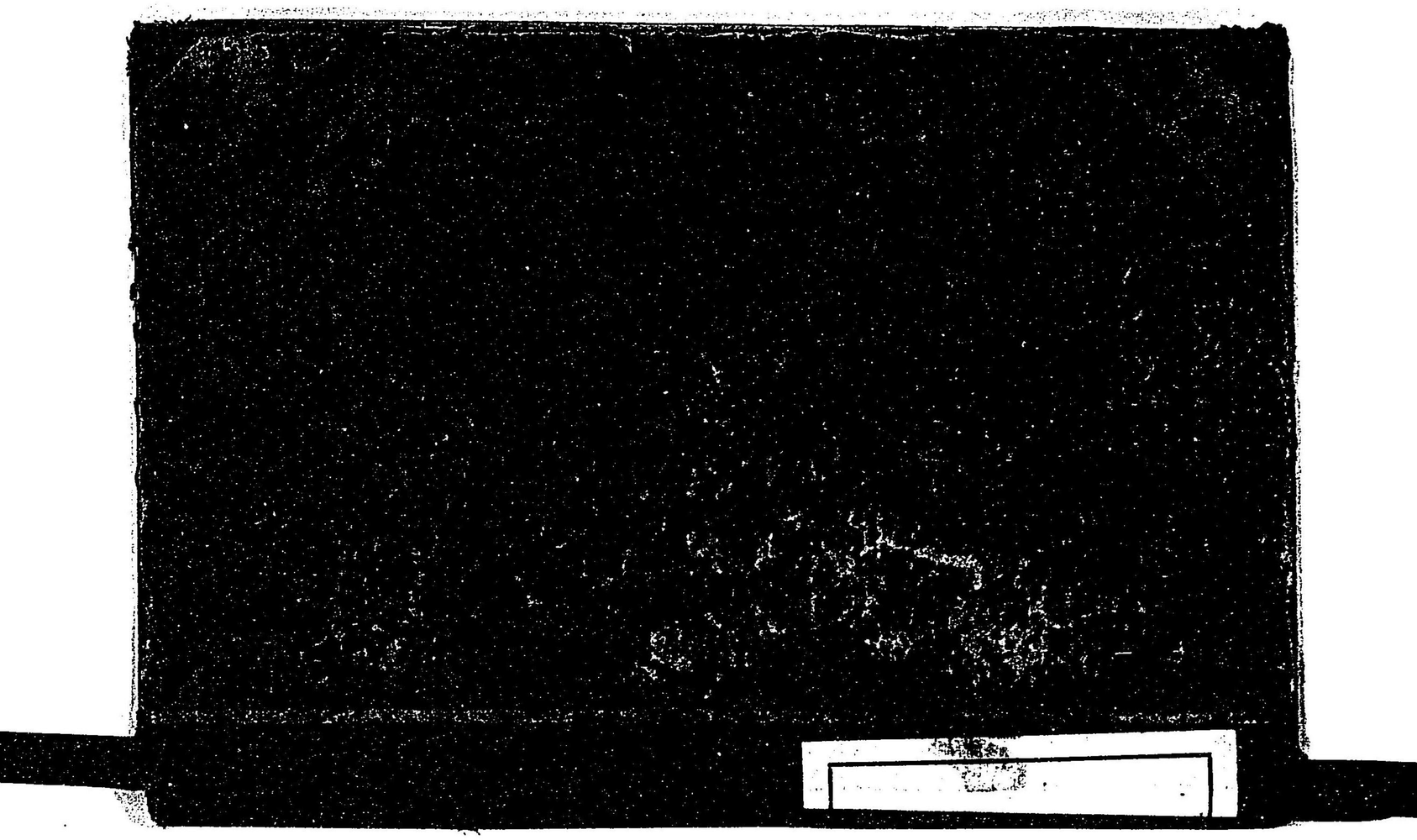
旅の友（再版）

人生の意義（トルストイ伯原著）（三版）

萬國平和會議評言（トルストイ伯原著）

滿洲問題の解決（外交評論第一編）（增訂四版）

獨佛露和新編會話



94
468
Ⓜ

027321-000-5

94-468

西園寺侯西洋礼式談

神東惇／編

M39

ADJ-0073

94
468
Ⓜ